

飯塚台遺跡

— 拠点集落の狭間に消えていった小さなムラのものごと —

調査課長補佐 高谷 英一

遺跡の位置と周辺の遺跡

飯塚台遺跡は、四街道市和田字飯塚台に所在する。鹿島川左岸域、四街道市上野辺りから成台中地区を経由して、みそら地区及び佐倉市大篠塚(おおしのづか)に続く小河川左岸の狭小な舌状台地に立地しており、標高は28～30m、低地面との比高差は約15mである。平成23・25年度に同じ宅地開発に先立つ発掘調査が行われ、縄文時代後期堀之内I式期(約4,000年前)を中心とする集落が検出された。

周辺の縄文時代遺跡は第1図に見られるとおりで、概して鹿島川支流の谷奥には前期、下流に中期前半の遺跡が目立つ。周辺2～3kmで後期の充実した遺跡となると、北方3.0kmの八木原貝塚、北東1.5kmの前広貝塚、東方2.4kmの坂戸草刈堀込遺跡があげられる。もう少し広く周辺を見てみると、北方5.5kmに吉見台遺跡、南東5.5kmに宮内井戸作遺跡、南西5.0kmに加曾利貝塚があり、さらに北西8.5kmには国史跡井野長割遺跡、北方8.5kmには江原台遺跡という後・晩期の大集落が認められる。直線距離で見れば、本遺跡はこれら当該期の拠点集落の狭間に、ほぼ等距離をもって営まれたことになる。

飯塚台遺跡の概要

平成23年度には狭小な舌状台地基部平坦面の1,520㎡、25年度にはその南側隣接地の185㎡を発掘調査した(第2図)。主な遺構は、住居跡30軒(早期茅山上層式期1、中期加曾利EIV式期1、後期称名寺～堀之内I式期28)、土坑102基(炉跡含む)、ピット233基等を検出、遺物は、縄文土器(早期～後期)・石器(削器・石鏃・石斧・磨石・石皿等の他、石棒・西日本型独鈷石)・土製品(蓋・ミニチュア土器、有孔円盤、耳飾り等)を出土した。

西日本型独鈷石

特に注目されるのは、22号住居跡から出土した「西日本型独鈷石」と称されるブーメランのような形状の石器である。半分を欠失しており、推定値で長さ21.4cm、幅5.8cm、厚さ2.5cm、重さ205.7gを測る。

独鈷石或いは独鈷状石器は中央に突帯或いは抉りを有し両端に刃部をもっており、形態が仏具の独鈷に似ていることからそう呼ばれている。縄文時代後期から全国に分布するが、多くは東日本に集中しており、晩期になると非実用的な形態となり、祭祀的な性格を持つ道具に変化したといわれている。

「西日本型」は「体部断面が円形または楕円形を呈し、両頭部先端が鋭く尖るもので、反りを有するもの、中央背部に抉りのみを有するもの」で、「晩期前葉を中心とした時期の所産」と言う(後藤信祐「独鈷状石器小考」『唐沢考古5』1985)。ここで飯塚台遺跡の例を見てみよう(第3図)。両側縁がほぼ鋭角に調整されており、断面は楕円というより蛤刃状に近い。両端部(片方欠損)は、鋭く尖るのではなくやや丸みを帯びている。中央部は摩耗が著しいが、抉り・突帯は認められない。このように、全体的な形状は「西日本型独鈷石」であるが、細部には違いがあり、より敲打器としての性格が強いように思える。また、出土した22号住居跡は、後述する柄鏡形住居跡であると考えられ、堀之内I式期に属する。本例は覆土中の出土であるため、必ずしも22号住居跡に伴うものとは言えないが、本遺跡の集落が、ほぼ称名寺～堀之内I式期に限定されていることを考えると、当該時期に帰属すると考えるのが妥当であり、従来、言われているよりも古い、後期前半の所産ということになる。

飯塚台の縄文時代後期の集落

本遺跡の主体は、出土土器(時期の分かる土器)の割合から考えても、7割を占める後期堀之内I式期、それもI式期であることは明白である。住居跡では30軒のうち、早期及び中期に属する2軒を除いた28軒は後期堀之内I式期に係ると判断されている。

住居跡群は、比高差の大きい狭小な舌状台地部の最も高い平坦部に立地しており、東西に走る弧状を成しながら集中し南側では希薄になっている。住居跡には形状の不明確なものが多く、壁の残るものは少ない。畢竟、^{ひっきょう}炉跡と考えられる焼土を中心にピットの配置を推し測り、住居跡の形状を判断せざるを得なかった中で、その特徴から、カタチを明らかにできる住居があった。それが、柄鏡形住居である。

柄鏡形住居の特徴

柄鏡形住居とは中部～関東地方に盛行する、出入口部が張出す文字通りの柄鏡形を呈する竪穴住居跡をいう。中部から関東地方西部にかけては縄文時代中期末から盛んになり、床面に石が敷かれた敷石住居や、特殊遺物を出土する例が多いことから、一般の住居とは区別された祭祀性の強い施設だと考えられている。関東地方東部では後期に入ってから造られ始め、特に堀之内I式の時期に盛行するといわれている。集落中の築造数も多く、円形或いは楕円形住居との際立った差異(例えば祭祀遺物の集中等)もなく特別な施設とは考えにくい。とはいえ明らかに平面形態の差異はあるわけである。そこで房総半島の柄鏡形住居の特徴を、飯塚台遺跡の南東5.5km、鹿島川上流域に位置する縄文時代後・晩期の拠点集落、宮内井戸作遺跡の柄鏡形住居から見てみよう。

- ①居住部はやや大型で円形或いは楕円形を呈す。
- ②居住部には粗密はあるが壁柱穴が巡る。
- ③炉跡は居住部中央より張出部に寄る例が多い。
- ④居住部の壁際に埋甕を有する例がある。
- ⑤居住部と張出部の連結部にL字状もしくは八字状、稀にI字状ピットを有する。
- ⑥張出部の長さは居住部径1/2を超えない例が多い。
- ⑦張出部に土坑を構築する。

宮内井戸作遺跡の柄鏡形住居

前述のうち、主要な特徴が②③⑤⑦で、典型的な柄鏡形住居は、そのすべての特徴を有しており、上から見たカタチも実にカッコいい(第4図)。しかし、こうした典型的な柄鏡形住居と上記条件の欠落した或いは乱れたカッコよくない柄鏡形住居、さらには柄鏡形を呈さない住居でも、出土遺物に目立った違いはない。やや恣意的に土器を見ると、(ア)1～2条の沈線による縦位の蕨手文・蛇行文が施文される土器を伴う住居は張出部の土坑がなく、連結ピットもややよれている、(イ)2～3条の沈線による縦位の文様間を沈線或いは集合沈線が連結する土器が伴う住居にはカッコいい典型的なものが含まれる、ようである。

飯塚台遺跡の柄鏡形住居

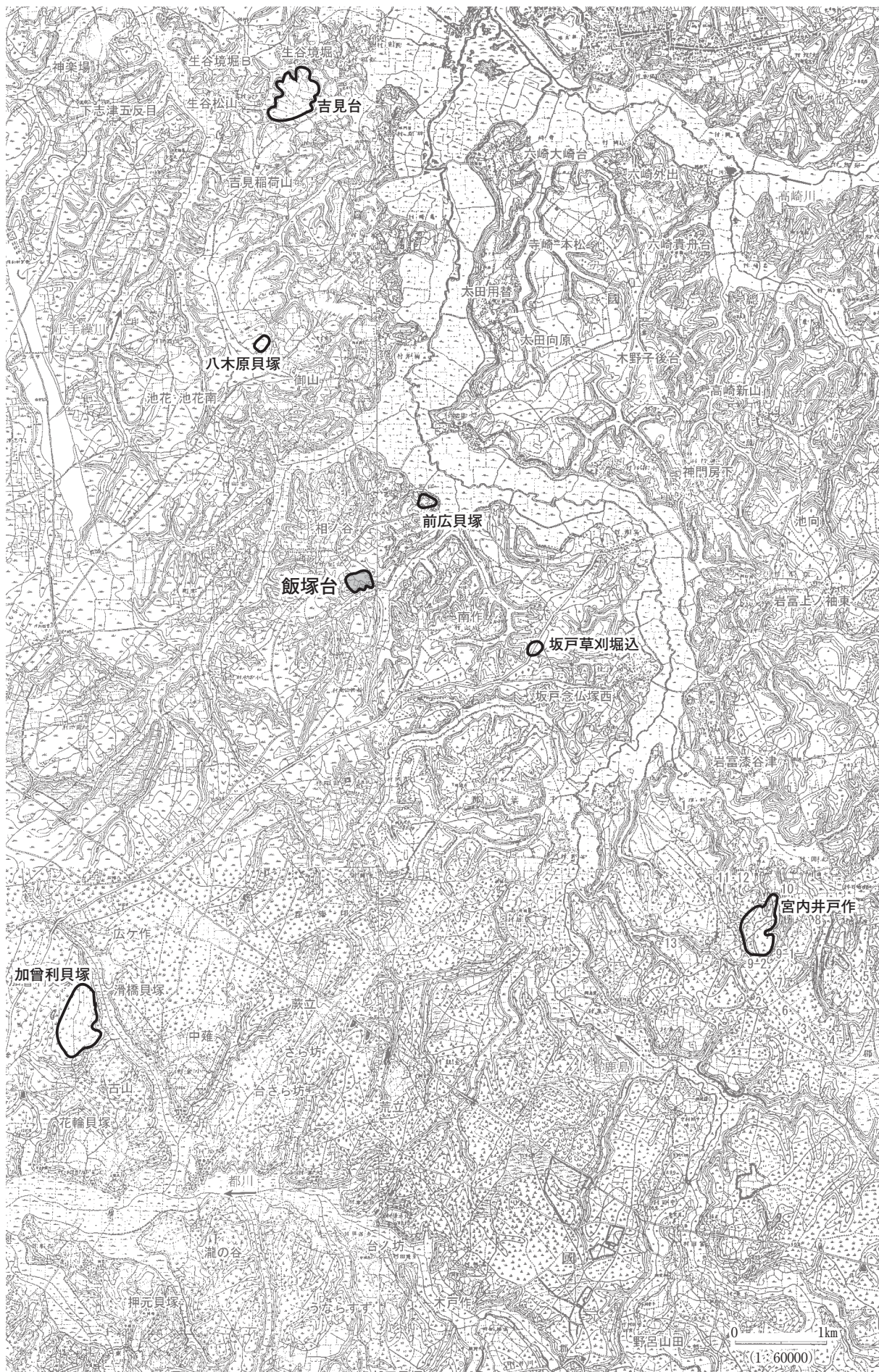
飯塚台遺跡で、明らかに柄鏡形を呈するのは20号住居跡である(第5図)。②③⑤の特徴がみられ、ややずれてはいるものの⑦もある。宮内井戸作遺跡に劣らずカッコいい。22号住居は②③のみが認められ、張出部は調査区外なのだが、特徴から推して柄鏡形を呈しよう。いずれも典型的な柄鏡形住居であり、2～3条の沈線による縦位の文様間を沈線或いは集合沈線が連結する土器が伴う。その他の明らかに柄鏡形ではない住居は、覆土中に加曾利EIV式・称名寺式をも多く含んでいる。

さよなら飯塚台！

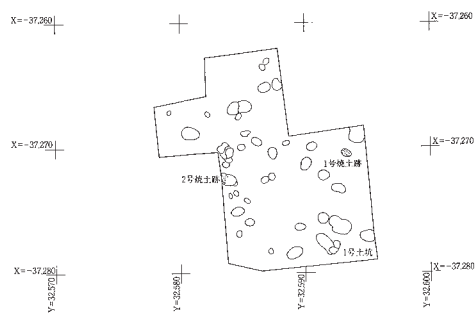
以降、土器片としては堀之内II式～後期安行式まで認められるが集落を構成する遺構はない。支谷を挟んだ別地点に展開する可能性がないわけではないが、飯塚台の集落はほぼ堀之内I式期で終息するようだ。

仮に、宮内井戸作、吉見台、坂戸草刈掘込、加曾利貝塚等が堀之内I式期、恐らくは柄鏡形住居が盛んに造られた頃に拠点集落化していったとしよう。その狭間にあつて、地理的な制約もあつた飯塚台遺跡には、それ以上の展開を望むべくもなかった。

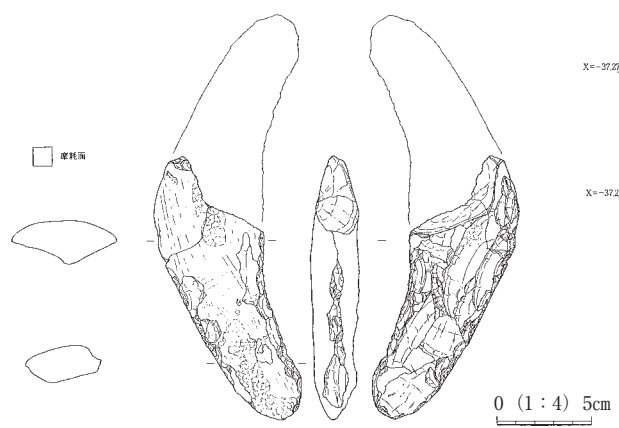
飯塚台の住人たちは故郷に別れを告げ、前述の拠点集落に収斂されていったのだろう。



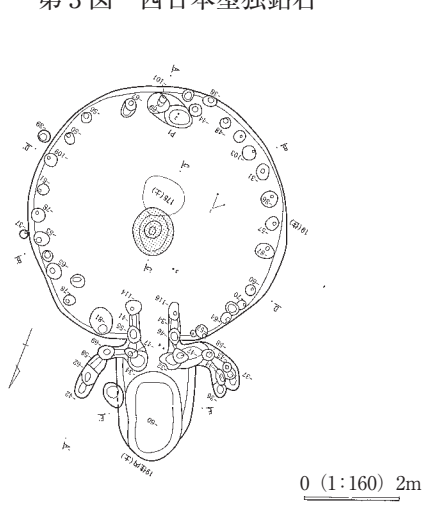
第1図 飯塚台遺跡と周辺の遺跡



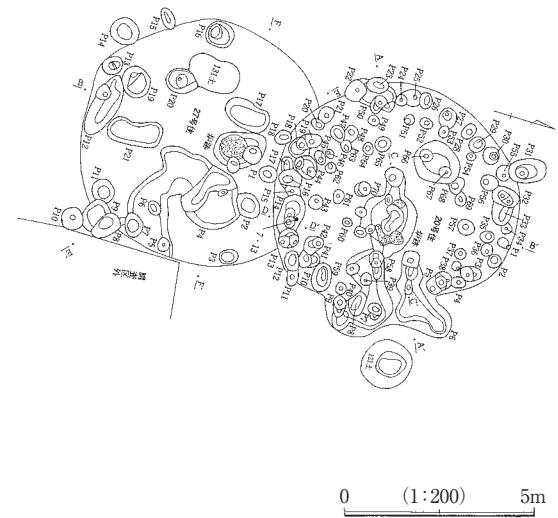
第2図 飯塚台遺跡遺構平面図



第3図 西日本型独钻石



第4図 宮内井戸作遺跡II-2地区19号住居跡



第5図 飯塚台遺跡20号住居跡